
特集：基礎医学研究の活性化を目指して

若手研究者の育成：今後求められるもの

坂 口 末 廣

徳島大学疾患酵素学研究センター神経変性疾患研究部門

(平成20年3月10日受付)

(平成20年3月17日受理)

はじめに

若手研究者をどのように育成していくのか、という問題は非常に難しい問題である。しかし、この問題はこれからの大学教育に課せられた重要な問題であり、われわれ指導者は逃げることなく正面切って解決していかなければならない課題である。筆者自身に良い解決策がある訳でないが、筆者が日頃考えていることをここに紹介したいと思う。

アクションを起こそう

筆者が学生諸君と接しているときにしばしば感じるのは、学生が夢を見ているのかな、という疑問である。「おまえは一体何がやりたいんだ？」と尋ねても、ほとんどの場合、明確な答えが返ってくることが非常に少ないような気がする。「将来何がやりたいんだ？」と聞いても、「特にありません。」とか「別にありません。」といった返事が多々ある。自分の人生なのに自分の人生でなく、まるで他人の人生のような答え方をすることを非常に危惧している。また、ものの考え方が非常に単一化してきているのではないかと危惧している。原因はさまざまあるのだろうが、共通テストをはじめとした客観テスト、いわゆるマークシートの弊害が大きいのではないかと考えている。マークシートは回答者に考えることを求めず、どれだけ早くまた効率よく記憶したことを思い浮かべることができるかを問うテストである。従って、考えるという訓練を受けることなく、学生は育つことになる。研究は分らないことを解決していくところに醍醐味があるので、このような思考しかできない若者では将

来の研究がおぼつかないのではと心配している。

成功するには、当然であるが、実際の行動・アクションを起こす必要がある。アクションなしでは成功はありえない。しかし、自分で考えるという作業を怠ってきた若者は、出てくるアクションが受動的である。従って、興味がわかず、行動も持続しないという悪循環に陥っている。このような状態でいくら研究を行っても、将来は暗いといわざるをえない。

「夢」をかたろう

われわれ指導者は一体何をしたらいいのだろうか。筆者は、一番大切なことは、若者に夢を見るまたは自分は今何がやりたいのかを明確にしてやることだと思う。ただ単純に「あれをしたい」「これをしたい」というのではなく、自分の内面からほとばしるような、またあらゆる犠牲を払ってでも「これをやりたいんだ」というような夢、願望を持つ、そういうことができる学生あるいは若者を育てていくことが大切ではないかと考えている。もしこのようなことができれば、若者の育成という点では80～90%は成功したのではないかと考えている。従って、まず、われわれ指導者が熱い夢を持ち、熱い思いを学生に語ることが肝心なのではないだろうか。しかし、若者に夢をみろと言っても、環境が整っていないと難しい話である。夢をみてチャレンジしたけれど失敗した、それで終わりだという話になれば、非常にみじめである。従って、チャレンジして失敗しても何度でも立ち上がり、再チャレンジできるような敗者復活戦システムを国、地域あるいは大学で作り上げることが大切ではないかと思う。昨今では研究の部門にも成果主義がどんどん入って

きている。成果主義だけでは、若者に夢を見させるのは非常に難しいのではないだろうか。

われわれはものを考えるとき、当然ながら言葉で考える。しかし、頭の中で考えるだけでは、自分の意見または考えが明確だと思っているつもりでも、実際に文字にして書こうとすると、なかなかできないというのが現状である。従って、思考を鍛えるためには、自分の考えをしっかりと文字にし、自分の考えを明確にするという作業を行うことが大切であると考えている。その一環として、自分が得た研究データ等をちゃんと文字で表現するような訓練をすることが非常に大切だと思う。昨今はものを書くというのが非常に少なくなっている。従って、考えを文字にするということは思考を鍛えるという点で非常に良いことではないかと考えている。またわれわれは、単に知識を問うのではなく、知識を生かすような能力を導き出すような指導することも大切だと考えている。

先ほども記述したように、成功するためにはアクション・行動をおこななければならない。行動は、われわれに何らかの思い、または考えがあって初めて起こすことができるものである。つまり、行動はわれわれの考え、または思いに完全に依存して起こるものである。熱い思い、熱い夢、自分が何をしたいかという願望をはっきりと持てば、それにしがった行動が自然と出てくるのではないだろうか。従って、このような思いなくしては、行動はありえず、それに続く成功もあり得ない。しかし、われわれは弱い生き物であるから、こういう熱い思いを持っていても時間がたつにつれて次第に冷め、行動は萎えてくものである。従って、こういうときに、われわれ指導者は、もしこの思いの冷え込みが経済的な問題であるならば経済的な支援を行ったり、精神的なものであれば精神的な支援を行ったり、学問的に行き詰っているのであれば学問的な支援を行ったりすることにより、いったん冷めた、または冷めかかった思いをもう一度燃え上がらせてあげることが必要なのではないだろうか。こういうことを通して、研究の持続性、ねばりというものをつくりだして、若者を成功に導いてあげることが大切ではないかと考えている。

若手研究者育成のためのロードマップ

最後に、これまでに記述した筆者の考えを、若手研究

者育成のためのロードマップとして示したいと思う（図1）。若手研究者育成に1番重要なことは、夢または熱い思いを抱かせることだと思う。自分はいったい何をやりたいんだということを明確にさせてあげることである。これは単なるああしたい、こうしたいでなく、自分が本当に心の底からやりたいと思うものを導き出してあげることである。このためにも、やはり経済的支援を含めて夢をみる環境づくりというものをわれわれ指導者がきちんとしなければいけないと思う。自分の思いがはっきりすると、次には、実際に行う研究の計画を立てることが必要になる。このとき、われわれは長年の経験があるので、しっかりと学問的な支援を行い、綿密な研究計画を立てるのをサポートする必要がある。計画ができれば次に行動、いわゆる研究を行うことになる訳であるが、そのためには、設備が整っていないと夢の実現は不可能である。従って、十分な研究設備の充実を行うことが必要になる。先ほども書いたように、思いというのは時間とともにしぼんでいくものであるから、われわれはこの思いがしぼんでいかにないように時おり精神的な支援を行ったり、経済的支援を行ったり、学問的支援を行ったりする必要がある。こうして、夢の持続、研究の継続というものを勝ち得て、この一連のサイクルを活性化させ、若者の夢の実現、成功へと導くような指導をしていくことがわれわれに課されているのではないかと考えている。

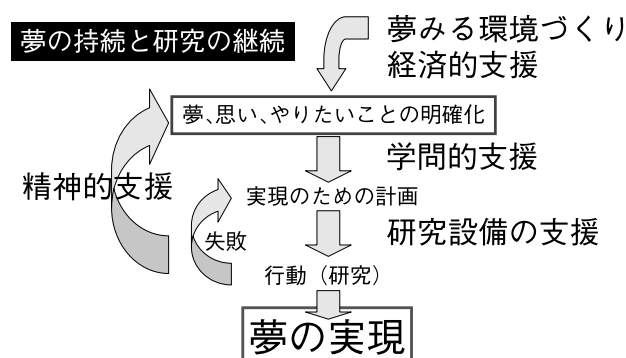


図1：若手研究者育成のためのロードマップ

謝辞：本文作成に当たり、村下希実子さんの御協力に感謝します。

Young scientists and basic research in medical sciences

Suehiro Sakaguchi

Division of Molecular Neurobiology, The Institute for Enzyme Research, The University of Tokushima, Tokushima, Japan

SUMMARY

Dream! This is the most important prerequisite for young scientists to make a success. Young scientists should ask themselves at any time “What do I want to do?” and clarify their scientific goals. Action is the second prerequisite to make a success. Without actions, no successes can be expected. Only continuous actions lead young scientists to their dreams or successes. Therefore, young scientists should be not only scientifically but also financially and mentally supported. Otherwise, they are not able to hold their dream or burning passion for basic sciences in their mind anymore, eventually being away from scientific fields.

Key words : basic science, medicine, faculty development, young scientist